

編集後記

『東洋大学百年史』の編集経過については、「資料編Ⅰ（上・下）」刊行までのことはすでに同編の下にまとめられているので、ここではそれ以後のことを簡潔に記しておきたい。

本学の百年史の刊行は百周年の記念事業として百年史編纂委員会と同編纂室を中心に進められてきたが、「資料編Ⅰ」刊行から半年余りの平成二（一九九〇）年三月にその組織は廃止され、事業は同年四月に新設された法人立の恒常機関「井上円了記念学術センター」に移管されることになった。三カ月の準備期間を経て、七月から同センターで再び編集が開始された。

移管された井上円了記念学術センターでは、前の編纂室時代にすでに指摘されていた「組織と人員の配置がしばしば変更され、編纂のための体制が必ずしも確立されていなかった」、「資料が十分に整理されていなかった」（『資料編Ⅰ下』、一〇〇九頁）などの問題を整理し、所長（高木宏夫）と専任研究員（三浦節夫）を中心に、新しい編集体制の確立に着手し、新組織はつぎの三点から構成することにした。

一、編集実務は、これまでは教員が兼務していたが、これを専任者を置く形にした。すでに編纂室補助員として大学史の知識と編集経験を持っていた山内瑛一、豊田徳子の両氏を編集員とし、この二名に新たに二名を加えて編集員体制を作った。

二、さらに編集企画と編集員の指導を担当する組織として、編集会議を設置した。委員には学外から『東京大学百

年史』を編集された寺崎昌男、中野実の両氏、学内から廣畑一雄、西村誠の両本学教授をお願いした。平成三（一九九二）年三月から実質的な活動を開始した編集会議は、教育学の専門家を中心に、センターの責任者、編集員の三者で構成したものである。

三、これらの二つの組織の上に、審議機関として平成三（一九九二）年七月に各学部長、関係機関の代表者、事務部長を委員とする百年史編纂委員会を同委員会「設置要項」に基づいて再編した。

このような組織の改編とともに、それまでの編集方針の大綱と五つの編という大項目についても具体的な検討をおこなった。収集された資料による目次案作成の過程（後述）で検討した結果、既決定の編集方針を基本的に受け継ぐとともに、とくにつぎの諸点に留意することになった。

一、これまでに収集した学内外の資料等に基づき、東洋大学が歩んだ百年の歴史を可能なかぎり客観的に描きつつ、日本近現代の学術・教育史の中に一私立大学としての東洋大学の歩みを位置づける。

二、大学における学術研究と教育活動の内容を叙述の基本とし、本学の教学の特性を浮彫りにする。

三、教職員・学生及び卒業生の学内外における活動に注目し、大学が果たした社会的役割を明らかにする。

四、大学の運営において生起した諸問題については、主観的な断定や評価を避け、史料に基づいて、客観的かつ公平な叙述をめざす。

五、叙述は史料の羅列を避け、史料に基づいた平明なものとする。

また、『百年史』は六巻八冊構成となっていたが、センターに移管された時点では、通史編Ⅰ、通史編Ⅱ、部局史編、資料編Ⅱ（上・下）、年表・索引編の五巻六冊の刊行という執行計画上でも多くの課題が残されていた。これを新組織のもとでいかに合理的に進めるのかという問題があった。

寄附金による記念事業としての性格や関係者の要望に応えるには逐次刊行形態がもっとも望ましかったが、編集責任者としての所長の決断で「逐次刊行を行わず、目次構成や資料整理という基礎作業に多くの時間をかけ、準備が整った後に一気に刊行を進める」と、その方針を転換した。ただし、編集期間は従来より二年短縮して、平成七年に終了する目標を再設定した。

平成三年七月の第一回百年史編纂委員会において、年史編纂に関する組織や編纂大綱などの基本的な案件が上程審議され、すべてが一括承認されて名実ともに再出発となった。平成二年の井上円了記念学術センターへの移管から一年余の期間がかかった。

各巻別には、つぎのように編集・刊行が進められた。

一、通史編Ⅰ

平成二（一九九〇）年七月から目次構成案の作成に着手した。はじめに「資料編Ⅰ」を基礎として、その周辺資料の補完収集を行った。その上で、前編纂委員会において承認されていた編集方針と通史編の目次第一次案を念頭に置きつつ、編・章・節の大枠を作り、必要な資料を選別し、同年一月までに創立者の誕生から旧制大学の終わりまでという通史編Ⅰの目次素案が完成した。さらに、この作業は継続され、新制大学以降の通史編Ⅱの目次素案も、平成三（一九九一）年三月に完成した。この素案作成は山内瑛一、豊田徳子、保科富士男の編集員が担当した。

執筆については目次案の作成と並行して、その実施体制が編集会議や編纂委員会で討議され、第一段階として全体を細かに分割して草稿を執筆する方法を採ることとした。この方法は東京大学百年史で経験されたものであった。

草稿の執筆は本学大学院の卒業生や在学生に依頼し、二九名から協力を得られることとなった。平成三（一九九一）年七月、これらの草稿執筆者との打ち合わせ会議が開催され、九月から実際の執筆が着手された。

平成四（一九九二）年三月から、提出された草稿がそれぞれ検討された。当初はこれらの草稿を入力しそれに加筆・修正を施して原稿とする予定であったが、完成度にかんがりの差があり、編集会議で詳細にわたり討議した結果、リライトで原稿化できるものはできるだけ活用し、それ以外のは参考とするにとどめて、新たに書き下ろすこととなった。

通史編Ⅰは創立から旧制大学の終了までを対象としたものであるが、このような経過を経て、リライトも含めた原稿が同年一〇月から山内瑛一、豊田徳子の両編集員によって執筆された。制作は白倉司朗氏（平成三年一月～平成五年三月）と鈴木經太郎氏（平成五年四月～）が担当した。さらに、大部にわたる本学の年史を日本の高等教育制度史のなかで理解できるようにするため、各編の冒頭に概説を設けることとし、編集会議の委員でこの分野の専門家である寺崎昌男氏（第一編）、中野実氏（第二編・第三編）に執筆を担当していただき、本文の校閲もお願いした。

通史編Ⅰは平成五（一九九三）年九月に刊行することができた。草稿の取り組みから刊行まで二年余の期間がかかったが、これによって編集体制はより完全なものとなった。

二、部局史編

部局史編は各部局によって責任執筆されたものである。執筆者の数は二二部局八七名であった。編集は平成二（一九九〇）年一月から編集員として加わった松本隆氏が担当した。同編の編集経過は「部局史編」の「後記」（二〇五七～一〇五八頁）に詳述されているので、ここでは簡単にふれておきたい。

平成二（一九九一）年一二月から資料整理・資料一覧の作成がはじまり、平成三（一九九一）年三月以降に各部局に対する執筆者選定依頼に着手した。同年七月の編纂委員会において編集事項が承認されたので、それ以降一二月までの間で執筆者との具体的な打ち合わせが行われ、執筆が開始された。当初、原稿提出日を平成四（一九九二）年一月

と設定したが、提出された部局が少なく、締め切りの延長を余儀なくされた。最終的には平成五（一九九三）年四月にすべての原稿が揃ったので、同年五月に刊行することができた。

三、資料編Ⅱ（上・下）

資料編Ⅱは新制大学から百周年までの時期を対象としたものである。企画の段階では編纂室時代に作成された『東洋大学史資料目録』（三冊）と、その後に収集された資料のデータから必要項目を抽出してデータベース化して活用した。分類の大枠は資料編Ⅰで確立されていたので、基本的にそれに基づいて編集された。

構成は山内瑛一・豊田徳子の両編集員が担当し、制作は松本隆編集員と鈴木經太郎氏が担当した。平成五（一九九三）年七月から編集がはじまり、「上」巻は平成六（一九九四）年四月、「下」巻は同年五月に刊行された。

四、通史編Ⅱ

通史編Ⅱは基本的に資料編Ⅱに基づいて執筆されたもので、対象とした時期は新制大学から百周年までである。

目次構成は前述のように通史編Ⅰの段階で完成されていたので、平成五（一九九三）年九月から原稿の作成が開始された。執筆は山内瑛一・豊田徳子の両編集員が担当し、制作は鈴木經太郎氏が担当した。概説は第四編を寺崎昌男氏に、第五編を中野実氏に本文の校閲とともにお願いし、平成六年一月に刊行された。

五、年表・索引編

年表については、編纂室時代に『東洋大学史紀要』第二号（一九八四年）で稿本が作成され、その原稿がコンピュータに入力されていたので、その後に収集された資料を加えて、データベースを構成して原稿を作成した。索引については、本学の場合には『東洋大学百年史』の六巻八冊を中心とする総合的なデータベースの作成が、活版から電算写植への印刷形態の変更を契機に構想されていたので、資料編Ⅰ（上・下）以外の全データが電算処理可能な状態で

保存されていた。したがって、これに資料編Ⅰのデータを加えて本文をすべてデータベース化し、これをもとに事項索引と人名索引の元原稿を作成した。事項索引については関連項目もみられるように編集した。

平成六（一九九四）年四月からデータの作成・変換が開始され、同年六月からはじめに年表、続いて索引の編集の取り組みがおこなわれた。編集は山内瑛一・豊田徳子の両編集員、制作は鈴木經太郎氏、データ処理は榊フクインの齋藤廣隆氏、茶山史朗氏が担当した。

ここで、次世代の大学年史の関係者のために、気のついた問題点を一言付記しておきたい。

ここ一〇年前後に日本の多くの大学から『百年史』が刊行され、全学的取り組みと客観的記述とをその特徴としている。本学もその例外ではなく、前記の「編纂委員会」や「資料編」がこれを表すものである。東洋大学の百年史は記念事業として取り組まれたから、具体的な読者を想定した本と言うよりも、大学教育・運営全般にわたっての「正史」を編纂すると言ったニュアンスが強く、観念的な理念や枠組はできあがったが、具体的な執筆に多大な難問を抱えていたことは前述の通りであった。この事情は、多くの他大学においても共通する点であり、年史関係の全国的組織「大学史協議会」における話題でもあった。

これまで、史学の分野でも教育学の分野でも、大学史の専門家は少なかったし、専門的な教育もなされなかった。しかし、多くの大学の百年史が刊行されつつある中から、この分野に関する研究や討論が進み、長期継続の傾向がみられる。したがって、現代では単なる「記念誌的百年史」ではない、いわゆる「高水準の百年史」を各大学が競って出版する時代になっている。年史の関係者はそれを知っているが、しばらくの間は大学関係者一般はこの変化に気づかないのではなからうか。また、年史の専門分野が学問上確立していなかったことは、理解者が少ない事を意味している。そのため、専従的に長期にわたって仕事をされた方の環境条件の改善はほとんど不可能であった。「大学史協

議会」でも指摘されているように、今後改善しなければならない問題であろう。

ここまで将来に対する危惧の部分を主として述べたのであるが、明るい展望となり得るものも少なくない。戦災や大学紛争などの多くの原因から、貴重な資料を失っているが、百年史の刊行を終わるに当たって、井上円了記念学術センターに資料室（仮称）を設置し、資料の保存・収集・整理およびデータベース化が決定された。また、八〇〇〇頁以上の『東洋大学百年史』を読み通す人は非常に少ないと想像されるので、最後の『年表・索引編』では、事項索引と人名索引とをかなり徹底して作成し、本書の利用と内容への手引きとなるように努力した。短期に仕上げているために、不十分な点や項目設定の仕方などに問題が残されていると思われる。コンピュータを使って作成したので、増補版作成でより使いやすいものができると考えている。

本書には関係者の膨大な時間と努力と知識と理論が注がれた。右のような諸問題を前向きに解決する努力があれば、つぎの大学史を作成する段階には、大学に寄与する点ではさらに大きいものが期待される。

最後に、編纂事業を終えるにあたり、各位に御礼を申し上げたい。各巻の編集作業は、通史編Ⅰと部局史編、資料編Ⅱと通史編Ⅱ、通史編Ⅱと年表・索引編のように、並行的に進められてきた。過密な編集日程に根本的な変更を加えることなく最終目標を達成することができたのは、関係者よりの貴重な資料の提供、寺崎昌男氏・中野実氏による指導、山内瑛一氏・豊田徳子氏を中心とする編集員の献身的な尽力、法人側の原稿の校閲、関係機関を含めた教職員の協力、㈱フクインの印刷に関する全面的な協力などがあつたからである。改めて深く感謝の意を表したい。

平成六年一月

東洋大学百年史 編集員（責任者）

高木宏夫